印度學佛教學研究

第五十四巻　第一号

四天王寺国際仏教大学における
第五十六回学術大会紀要（一）

ai. *ádbhuta-*, *ádabdha-*, jav. *abda-*, *dapta-*, 及び ai. *addhā́*, aav. ap. *azdā*

後　藤　敏　文

平成 17 年 12 月

日本印度学仏教学会

（228）　　印度學佛教學研究第54巻第1号　平成17年12月

ai. *ádbhuta-*, *ádabdha-*, jav. *abda-*, *dapta-*, 及び ai. *addhā́*, aav. ap. *azdā*

後　藤　敏　文

1.　古インドアーリヤ語 [ai.] ***ádbhuta-***「不思議な，驚異の」はリグヴェーダ［RV］以来普通の語で，仏典では「奇，希有，奇特，殊勝，未曾有」などと漢訳される．アヴェスタ語 [av.] *xratə̄uš... yə̄m naē̆čiš dābaiieⁱtī*「誰もそれを欺く［ことが］ない精神力」（Y 43,6）が RV *ádbhuta-kratu-*「驚異の（欺き得ない）精神力を持つ」の言い換えと見られることから，*ádbhuta-* が ai. *dabh*, av. *dab*「欺く，［策略によって］損害を与える」に由来することは明白である．[1)]「驚異の」等の意味は「欺かれない，動かし難い，紛れもない」を経たかと思われるが確認はできない．

RV には24回単独で現れ，Agni をはじめ神々に用いられる．*turī́pa-*「精液」が「不思議な，驚異の」と形容され[2)]，X 105,7 には *ádbhutaṃ ná rájaḥ*「神秘の暗闇のように」が見られる．形容詞は中性形で，もの，こと，状態を表すが，*ádbhuta-* にも，I 170,1 *kás tád veda yád ádbhutam*「誰がその驚異を知っているか」，I 77,3 *mitró ná bhūd ádbhutasya rathī́ḥ*「Mitra のように，［Agni は］驚異［を操る］御者となる（cf. HOFFMANN Injunktiv 214f.)」が見られ，I 125,11 には複数形 *áto víśvān_iy ádbhutā ¦ cikitvā́m̐ abhí paśyati | kr̥tā́ni yā́ ca kárt_uvā*「ここに，為された，そして為されるべきものたちであるあらゆる驚異たちに気づきながら，［Varuṇa は］監視している」がある．[3)]

á-dbhuta- は Determinativkompositum（Karmadhāraya）と判断されるが，*adbhutá-*（アクセント位置からは Bahuvrīhi）も現れる：I 120,4 *ví pr̥chāmi pāk_iyā̀ ná devā̀n ¦ váṣaṭ-kr̥tasy_aādbhutásya dasrā*「素朴に，私は［他の］神々を問いたださない，*váṣaṭ* の発声をなされた驚異の［Soma］について，超能力ある［両 Aśvin］よ」．二次的語形の背景には，詩人の解釈が絡む可能性がある．即ち，「欺瞞によって損なわれない」に由来する *á-dbhuta-* を「欺きを持たない，欺かない」という能動的意味に用いれば Bahuvrīhi となる．この場合 *dabh*「欺く」が依然意識されていたことになる．

複合語 *ádbhutainas-* は原義の残存を確実に示す．「驚異の罪過を持つ」は意味を

成さず，「その人・ものにとっては，罪過が *ádbhuta-* である」，「[その者の前では] 罪過をごまかせない」と解される．2例とも補遺スークタ中にあるが，依然原義が意識されていたことを証する：VIII 67,7 *ā́dityā ádbhutainasaḥ*「Āditya たちは［その前で］罪過を欺き減らすことのできない（ごまかせない）者たちだ」.[4)]

2. 同じく，否定辞 *á-* と VAdj. から成る語に[5)] ***á-dabdha-*** があり（**dabdhá-* はない），原義に近い「欺かれない，欺瞞によって損なわれない」を意味する.[6)] RV に 48 回見られ，マントラの言語層に属する語彙である．「欺きがたい」監視者などについて言われ，文中に用いられる動詞にも「守る，監視する」が多い．例えば，I 24,10 *ádabdhāni váruṇasya vratā́ni* | *vicā́kaśac candrámā náktam eti*「Varuṇa の掟たちは欺かれない．月は夜，見張りながら行く」.

3. *dabh* の VAdj. には，本来 *-d^h-b^h-ta-* から BARTHOLOMAE の法則を経た *-dbd^ha-* が期待されるが，3 破裂音連続は保持されないので，脱落による不明瞭化を回避すべく *á-dbhuta-* は *-u-* を挟み，*á-dabdha-* は Vollstufe の語根を導入している（cf. VAdj. *-labdha-* : *labh*「つかまえる」）．しかし，新アヴェスタ語 [jav.] には *a-bda-* があり，まさしくインドイラン祖語 *-dbd^ha-* から，*d* が Dissimilation により消滅した形を示す．従って，インドイラン祖語における *-dbd^ha-* の存在は確かである．BAILEY apud GERSHEVITCH Fs.Pagliaro II (1969) 181, NARTEN Yasna Hapt. (1986) 202[37] はこれを指摘し，HINTZE Der Zamyād-Yašt (1994) 103–106 が詳しく論じているが，問題は尽くされていない．jav. *abda-* は「素晴らしい」ほどの意味で用いられ（cf. *wonderful*），ai. *ádbhuta-*「不思議な，驚異の」に近い派生的語義を示す.[7)] jav. ***dapta-***「欺かれた」は ai. (*á-*)*dabdha-* に対応する（*-ta-* はイラン語に多い morphophonetisch な明瞭化）.[8)]

4. 従ってまた，インドイラン祖語段階には，*PaP*（*P*：破裂音）という構造の語根に，*P* の前でも規則通りの弱形 *PP* があったことになる.[9)] 明瞭化が図られなければ，ai. には **á-ddha-* か **á-bdha-* が予想される．ai. *á-dbhuta-* は語根の子音要素と VAdj. の形態 *-ta-* とを救うべく *-u-* が導入された結果であるが，*-u-* は現在語幹 *db^h-náu̯-*[10)] を Infix-Präs. (*db^h-ná-u̯-*) と再解釈することにより抽出されたものである[11)].

本来の語義「欺かれない，騙されない」は jav. *dapta-*，ai. *á-dabdha-* に，派生的語義はより古形を残すと思われる *a-bda-*「素晴らしい」，*á-dbhuta-*「不思議な，驚異の」に担われたことになる．

3 破裂音連続 *-dbd^h- はイラン語派では *-bd-* に異化省略されるが，インド語派が

辿ったであろう道筋は確定できない．**áddha-* の可能性もあるため，似た形を持つ副詞 *addhā́*「明らかに」を検証しておきたい．

5.　ai. *addhā́* と aav. *azdā*，古ペルシャ語 [ap.] *azdā* は，一般に名詞 **ad^h-tā-*（厳密には BARTHOLOMAE の法則が働く）「確証，通知」の Instr. に由来すると解され，インドイラン祖語 **ad^h*「言う，語る」に帰せられる：MAYRHOFER EWAia II 64 (1992) s.v., SZEMERÉNYI Sprache 12 (1966) 202–205 = Scr.Min. 1867–1870, cf. LIEBERT Nominalsuffix *-ti-* (1949) 182[1]．KÜMMEL Perf. im Indoiran. (2000) 117 s.v. *ah* (**adh*) 'sagen' に至っては，この語源説から逆に語根の意味を「知らせる，意見を言う」であると主張している；Lexikon der indogermanischen Verben [LIV] 222 s.v. **Hed^h-* 'sagen' もこれによる．SZEMERÉNYI はイラン語形を別起源の名詞と主張するが根拠がない．昔からの語源説（SZEMERÉNYI 204 によると，GRASSMANN, RENOU, MAYRHOFER KEWA）に戻るべきであろう．

ai. ***addhā́***「はっきりと，明確に」は RV には 6 回現れる．例えば，X 111,7 *ā́ yán nákṣatraṃ dádṛ̥śe divó ná* ¦ *púnar yató nákir addhā́ nú veda*「もし，天の天体（太陽）が見えてきていないならば，誰も，今，はっきりとは知らない，［それが］再び進み行く［かどうか］を」.[12] Śatapatha-Brāhmaṇa には *as*, *bhū* を伴う述語副詞構文が見られる.[13]

ap. ***azdā*** も *bav*「なる」，*kar*「する」とともに述語副詞構文を作る．*azdā kušuvā*「君は［自らの中に］はっきりとせよ」（Iptv. 2.Sg. Med., poss.-affektiv）は，*azdā* が SZEMERÉNYI の言うような名詞ではあり得ないことを示す.[14]

aav. ***azdā*** は他に用例のない *zūtā* と挿入文を作っており，必ずしも意味は明瞭ではないが，Ap.，中期イラン語諸方言の証拠から，副詞「はっきりと，明確に」と考えて問題はない.[15]

結論として，問題の語はインド，イラン両語派を通じて，「はっきりと，明確に」を意味する副詞である．Eleph.-Pap. *ʾzdkrʾ* (= ap. **azdākara-*), Turfan mp. *azdēgar*「告知者」は「はっきりとさせる者」を意味する．Arm. LW *azd aṙnel* 'kund machen', *azd ełew* 'es wurde kund' (cf. HOFFMANN Aufs. 342, SZEMERÉNYI 204) も同様．もし Chr.Sogd. *'zd'*, *'yzt'*, Buddh.Sogd. *'zt'* が実際単独で「報告」を意味するならば，**azdā-kara-* からの再解釈に基づくものと判断されよう，cf. Chr.Sogd. *'zd'qry'* 'revelation, announcement' (<**azdā-kara-i̯ā-*, GERSHEVITCH Gramm. Manich. Sogd. 171)．SZEMERÉNYI は Vessantara-Jātaka *kδ* (*ZY*) *L' 'zt' ''t* を "**yadi naiy azdā ahatiy* 'if there be no news (to you)'" と説明するが，述語副詞の構文を想定すれば，「はっきりして

いないかもしれないが」という直訳に問題はない.

問題の語を **ad*^{h}*-tā-* の Instr. から導く場合，語根名詞 **ád*^{h}- 「言明」＋接尾辞 *-tā-*，さらに，アクセント移動による副詞への転換を仮定する必要がある，cf. ai. Instr. *puruṣátā*「人々の仕方で，人々の間では」. 一次接尾辞 *-tá-* (**ad*^{h}*-tá-*) を仮定すれば Adv. (< *Instr.) *dakṣiṇā́*「右側に」:: *dákṣiṇa-*, *ubhayā́*「両様に」:: *ubháya-* が参照される. さらに，**b*^{h}*au̯H*「なる」，**kar*「する」との構文は *śūlā́ kar*「串刺しにする」，*dívā as/bhū*「昼である・になる」（HOFFMANN Aufs. 350–355）のように理解される.

しかし，存在が確認できない名詞の Instr.*「証言をともなって」＞*「周知の，確認された」＞「はっきりと」という展開より，代名詞 **ad*「これ」＋副詞接尾辞 **-d*^{h}*ā́* から導く方が自然である：「このとおり」，cf. *katidhā́*「何重に，何カ所で」，*caturdhā́*「4 重に，4 通りに」. この接尾辞はイラン語派には十分には確認されないが，語根名詞 **d*^{h}*éh*$_{1}$-「決定」の Instr. に遡るであろう（cf. SCARLATA Wurzelkomp. imRV, 1999, 265f.）.[16)]

---

1)　HOFFMANN Fs. Sommer (1955) 80 = Aufs. 52[1]（「手出しのできない精神力」）. MAYRHOFER Etym. Wb. d. Altindoar. [EWAia] I 64, 806, 695 参照.

2)　I 142,10 *tán nas turī́pam ádbhutam ... tváṣṭā póṣāya ví ṣyatu* ¦ *rāyé nā́bhā no asmayúḥ*「Tvaṣṭar は我々のこの不思議な精液 *turī́pa-* を ... 繁栄のために放て，富のために，我々の臍（の中）に，我々を思って」.

3)　HUMBACH Kratylos 32 (1987) 51 は *ádbhutā* を **ádbhuti-* “Nichttäuschen, Nichtgetäuschtwerden” の Lok. と主張. MAYRHOFER EWAia I 806, II 695 これに従う.

4)　GE は *ádbhutainasaḥ* を *ánāgasaḥ* と同格，*ā́dityāḥ* を Vok. に取り，「罪過が認められない者にとって」とする. さらに V 87,7.

5)　*án-ati-dbhuta-* は *-dbhuta-* が過去分詞（VAdj.）に遡ることを証する（cf. STRUNK Nasalpräs. 66）. 否定辞 *á-* ＋ VAdj. が「…され得ない」を意味し，事柄として Gerundiv と重なることについては HOFFMANN Aufs. 191[5] 参照.

6)　*ádbhuta-*「驚異の」と *ádabdha-*「欺かれ（得）ない」の並出例：IV 2,12 *kavíṃ śaśāsuḥ kaváyó ʾ*$_{a}$*dabdhā* ¦ *nidhāráyanto dúr*$_{i}$*yās*$_{u}$*v āyóḥ* | *átas tváṃ dr̥̄śyām̐ agna etā́n paḍbhíḥ* ¦ *paśyer ádbhutām̐ aryá évaiḥ*「欺かれることのない見者たちは，見者に命じた，［彼を］Āyu の戸口［ごとに］に設置しながら. だから，君は，Agni よ，（Āyu の子孫たちの間にいる見者として）ここにいる見るべき者たち（人間）を［その］足たちとともに，驚異の部族民たちを［彼らの］歩み（植民活動）たちとともに見てほしい」. *aryás* を「部族に属す

る者」という意味の *arí-* の Akk. Pl. と解した．

7) Vīd 2,24 *parō* $^{+}$*zəmō* (GE *zimō*) *aētaŋhå* $^{+}$*daŋ́hāuš* (GE *daŋ́huš*) *aŋhat bər*^{ə}*tō vāstrəm* ǀ *təm āfš pa*^{u}*ruua vaza*^{i}*δiiāi* ǀ *pasca vītaxti vafrahe* ǀ *abdaca iδa yima aŋ*^{v}*he astuua*^{i}*te sadaiiāt* ǀ *yat iδa pasāuš anumaiiehe paδəm vaēnā*^{i}*te*「牧草地を支えるこの土地に，［季節が］冬の前になるであろう．この［冬の］後には，雪塊の融解によって水が多く導かれることになる．そうすると，Yima よ，ここには肉体を持つ存在に素晴らしいことが現れ出でることになろう，ここに鳴き声をたてつづける家畜（羊）の足跡を人が見ることになるという」，Yt 5,34 *yōi hən kəhrpa sraēšta* ǀ $^{+}$*zazā*^{i}*te* $^{+}$*gaēθaiiāi tē*$^{+}$ ǀ *yōi abdō.təme*「美しい身体をもって，［肉体を持つ］生き物たちのために身をもたげる（立ち上がる），最も素晴らしい両女性」，Yt 19,10「素晴らしい多くの［被造物たち］」．

8) Y 10,15 *auuaŋhər*^{ə}*zāmi* $^{+}$*janiiōiš* (GE *janaiiaoš*) *ūnąm* ǀ *ma*^{i}*riiaiiå əuuītō.xarəδaiiå* ǀ *yā* $^{+}$*ma*^{i}*ni-ie*^{i}*te* ($^{\times}$*mainiieiṇti*) *dauuaiie*^{i}*ṇti* ǀ *āθrauuanəmca haoməmca* ǀ *hā yā dapta apanasiie*^{i}*ti* ǀ *yā tat ha-omahe draonō* ǀ *nigåŋhaṇti* $^{+}$*nišhiδa*^{i}*ti* ($^{\times}$*nišhaδaiti*) ǀ *nōit tąm āθrauuō.puθrīm* ǀ *naēδa* $^{+}$*daste* (GE *dasti*) *hupuθrīm*「私は放っておく（無視する），［その］女の欠陥を，祭官と Haoma とを欺いているつもりの，［自ら］欺かれて滅び行く，Haoma のその分与を食しながら座る，絶え間なく叫んでいる (?) ならず者女の［欠陥を］．Haoma はその女を，祭官の息子たちをもつ者へと，また，よい息子たちをもつ者へと定めない（しない）」．

9) 語根 *dagh*「(完全には届かず）そこまで達する」の Präs.Opt. *daghnuyāt*「外れてほしい」KS–KpS^{p} が参照される（規則通り Nullstufe ならば **dghnuyāt* または **kṣṇuyāt*）．インドイラン祖語における語根 **d*^{h}*ag*^{h} (uridg. **d*^{h}*eg*^{wh}) の弱形は，これも古アヴェスタ語［aav.］Y 28,3 *xšaθrəmcā aγžaonuuamnəm*「そして，外れる（しくじる）ことのない支配」に証される：*a-γžaonuuamna-* (**a-γžənuuamna-*) < **-gž*^{h}*anu̯-amna-* < **-g*^{wh}*þn̥u̯-m̥h*$_{1}$*no-* < **-d*^{h}*g*^{wh}*n̥u̯-m̥h*$_{1}$*no-*（KLINGENSCHMITT Altarm. Verbum, 1982,187[32]）．

10) heth. *tepnuzzi*「小さくする，けなす，挫く」，ved. *dabhnóti*「欺く，騙す」，aav. Inj. *d*^{ə}*bənaotā* (< uriran. **dbanau̯-* < **db*^{h}*n̥néu̯-*)「君たちは欺く」Y 32,5．印欧祖語における **d*^{h}*eb*^{h} の意味を NARTEN Kl.Schr. 380–395 は "'gering sein, gering machen' (fientiv-intransitiv und/oder fazientiv-transitiv)" とし，'vermindern' > (indoiran.) 'betrügen' > 'schädigen' の展開を考える．

11) ZEHNDER LIV 133[1] もそう解釈．*-u̯-* による形成について，GOTŌ I.Präs.164[262]，TICHY Nom. ag. auf *-tar-* (1995) 41 とその注，文献参照．当該語根の *-u-* による拡大形は aav. Y 31,17 *mā əuuīduuå a*^{i}*pī d*^{ə}*bāuuaiiat*「知らない者は，それなのに欺くことを止めよ」(< **db*^{h}*āu̯-ai̯a-*)，n. *d*^{ə}*baoman-*「欺瞞，虚偽」(BARTHOLOMAE Wb 322 s.v. は複合語 *ā.dəbaoman-* "Betörung" に解するが，KUIPER IIJ 15, 1973, 200–204 を見よ：*ā*... *upā-jasat*, *upā* は aav. の pausa 形による）に見られる．STRUNK Nasalpräs. 66f. は *srāuuaiie*^{i}*ti*, *śrāváyati*「聞かせる」:: **ćr̥náu̯-*^{ti} (*sur*^{u}*nao*^{i}*ti*, *śr̥ṇóti*)「聞く」，n. *sraoman-*「聞こえ」への比例的類推を指摘．

12) その他 I 52,13 *satyám addhā́ nákir anyás t*$_{u}$*vā́vān*「事実，明確に（この通り），君のような者は他に誰もいない」，III 54,5 *kó addhā́ veda ká ihá prá vocat* ǀ *devā́m̐ áchā path*$_{i}$*yā̀ kā́ sám eti*「誰がはっきりと知っているか．誰がここで（地上で）明言するか．どの道行きが神々へ向かって行き着くか」(X 129, 6 にも類似例），VIII 101,11 *báṇ mahā́m̐ asi sūr*$_{i}$*ya* ǀ

báḍ āditya mahā́ṁ asi | *mahás te sató mahimā́ panasyate* ¦ *ₐddhā́ deva mahā́ṁ asi*「確かに君は偉大だ，太陽よ．確かに君は偉大だ，Āditya よ．偉大である君の偉大さは称讃される．明確に（この通り），神よ，君は偉大だ」．— RV, AV にはこの副詞からの派生名詞 *ad-dhātí-* がある．「確実明瞭であること」から「[隠されたもの・ことを] はっきりと見ること」>「はっきりと見る者」へと具体化されたものと考えられる: e.g.RV X 85,16 *dᵤvé te cakré sūrᵢye* ¦ *brahmā́ṇa r̥tuthā́ viduḥ* | *athấikaṃ cakrā́ṃ yád gúhā* ¦ *tád addhātáya íd viduḥ*「君の二つの車輪を，Sūrya よ，祭官学者たちは正しい時［の巡り］に沿って知っている．だが，隠れている一つの車輪，それを知っているのははっきりとものを見る者たちだ」．

13)　HOFFMANN Aufs. 348 Nachtr. (1976), GOTŌ Gs.Renou (1996[1997]) 83 と n.39 参照．

14)　DB I 31f. *yaθā* : *Kaₙbujiya* : *Bardiyam* : *avāja* : *kārahayā* : *naiy* : *azdā* : *abava* : *taya* : *Bardiya* : *avajata*「Kanbujiya（カンビュセス）が Bardiya（スメルディス）を殺害した時，B が殺害されたことは，軍勢にははっきりしていなかった（事実上：知らされていなかった）」，DNa 42f. *avadā* : *xšnāsāhay* : *adataiy* : *azdā* : *bavātiy*「そこで君は認識することになろう．そうすれば君にはっきりすることになろう」（45 行も同様），DNb 50 *marīkā* : *daršam* : *azdā* : *kušuvā* : *ciyākaram* : *āhay* : *ciyākarama-ma-taiy* : *uvnarā* : *ciyākarama-ma-taiy* : *pariya-nam*「配下の者よ，君がどのような種類の者であるべきか，君のよい男振りたちがどのような種類のもので［あるべきか］，君の卓越性がどのような種類のもので［あるべきか］，決然と［自らに］はっきりとせよ」．

15)　Y 50,1 [(b)]*kē mōi pasə̄uš* ¦ *kə̄ mə̄.nā θrātā vistō* [(c)]*aniiō aṣ̌āt* ¦ *θβatcā mazdā ahurā* [(d)]*azdā zūtā* ¦ *vahišāatcā manaŋhō*「誰が私の家畜の，誰が私の護り手として見出されているか，真理と君と，主なる智慧よ—呼びかけの中にはっきりしている—，［そして］善き思考と，以外に」．

16)　SZEMERÉNYI の反証はイラン語派に *ad* が無いという点に尽きるが，aav. の接続詞 *at*「それから，かくて」，*ad-āiš*「そして彼らによって」（HOFFMANN–FORSSMAN 112, NARTEN YH 94f., 104）の背後に確認される．

（平成 17 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 C による研究成果の一部．論述の詳細については T. GOTŌ Fs.Klingenschmitt［編集中］を参照されたい．）

〈キーワード〉 Veda, Avesta, *ádbhuta-*, *ádabdha-*, *addhā́*, *abda-*, *azdā*, 語源, 音韻

（東北大学大学院文学研究科教授，Dr. phil.）